

PRO-LIFE NEWS

(中絶に反対する運動)

〒780 高知市新本町一丁目七番三十一号

繁殖の計画をたてるのは？

近代優生学概説

ジョン・カヴァナウ オキーフ

私達はより良い製品を得るためにバラやトマトや牛などを交配して繁殖させます。それではなぜ、地球上で最も価値のある種、人間を交配し、より良い製品を作り上げないのでしょうか？このような考え方は単純で魅力的で広まり易いものです。しかしながら同時にこの考え方は完全なる悪でもあるのです。

これが産児制限の主な目的なのです。現在普及している中絶や、科学的人種差別」など、数多くの罪悪の根元が優生学なのです。

絶を選択するのは女性の権利であると考えていて、なおかつ強制的な中絶を支持する人達の存在は、若い中絶擁護家やもっと純真な中絶擁護家達に大きな衝撃を与える事になります。

絶を選択するのは女性の権利である。と云っていましたが、結局中国での強制的な中絶を認め、女性を見捨てる政策をとりました。クリントンには女性が生を選択する権利を守ったのではなく、死を選択する権利だけを守ったのです。もちろん彼だけが偽善者なのではありません。多くのフェミニストのグループが同じことをやっているのです。

「良い生」と言う意味）と言います。優生学的活動は、選択的な繁殖によって人類を改善することを目的としています。マーガレット・サンガーがこれについて次のように述べています。「適しているものからより多く、適していないものからより少なく、こ

「優生学的活動がただのお飾りの存在でないことを知り、さらにその力を知るには、まずフェミニストと優生学者を分類する簡単なテストをやってみる事です。中絶は女性の権利であると思っている人達に、中国の強制的な中絶政策に賛成か否かを尋ねてみましょう。その結果以下のことに気づくでしょう。(1) 大半の人がその政策のことを知っている(2) 感情的な反応を示す人が多い(3) 答えが賛否半々に割れる。中国のその政策を擁護する人は変人かも知れませんが、お飾り的存在ではありません。中

中絶擁護活動は女性の権利を主張する(赤ちゃんの権利は無視しながら)フェミニストだけからなっているわけではありませぬ。中絶擁護派のフェミニストは優生学者と歩みを共にしています。そして彼らはプライバシーや女性の権利について全く無関心なのです。マーガレット・サンガーが70年前にこの二つの団体を一つにしましたが、それでも今なお二種類の中絶擁護家があります。例えば、クリントン大統領は、中絶を選択

するのには女性の権利である」と云っていましたが、結局中国での強制的な中絶を認め、女性を見捨てる政策をとりました。クリントンには女性が生を選択する権利を守ったのではなく、死を選択する権利だけを守ったのです。もちろん彼だけが偽善者なのではありません。多くのフェミニストのグループが同じことをやっているのです。合衆国内で、優生学は黒人の出産制限のために用いられてきました。最も顕著な例がノーブランドで、ノーブランドは小さなプラスチックの棒で、医者が女性の皮膚の下に差し込むことで数年間子どもを産めなくします。最近の生殖関係の技術の中で、ノーブランドは画期的な進歩であるとされています。しかしノーブランドは主に貧困地域で使用されて来ました。金持ちはノーブランドなどは使

ません。彼らは人工授精や生体外受精（試験管ベビー）や精子バンクなどを利用します。そして、あぐの果てには遺伝子工学までも利用するのです。

一九三十年代、すなわち第二次世界大戦以前で、アドルフ・ヒトラーが優生思想に悪しきレッテルを貼る以前、優生学的活動は人口に関する研究と遺伝学という二つの新しい考え方を生み出していました。人口に関する研究とは、「不適當な者」の人口を減らす方法を見いだす事でした。また、遺伝学とは「優秀な者」の人口を増やす手段を見いだす事でした。ノーベル賞受賞者から精子を買い取り、ハーバードから卵子を買い取り、それをいじくり回せるのです。

一番最近優生学が社会に台頭した時、結果として何百万という数の人が死にました。私達はそれを繰

り返してはならないのです。より優秀な人間を繁殖させるという考えは素晴らしいものです。しかしその繁殖を行うものは神でなくてはならないのです。そして「改善」に対する神の考え方は私達のそれとは異なるのです。彼は、「一番のものが最後に、最後のものが一番に」と明言しています。また、神は聖母マリアの心にこのような歌を伝えていますが、「彼は貧しい者に良いものを与え、豊かな者には何も与えず送り出したのです」。

リーガン大統領によるこの声明文を真実でないと否定する人もいた。しかし、後にこのことが全く事実であることを確認する文書とある専門家のグループより提出された。大

胎児は痛みを感じるか

「中絶されるとき、胎児は痛みを感じています。長くて辛い痛みを。」

元米大統領：リーガン

リーガン大統領によるこの声明文を真実でないと否定する人もいた。しかし、後にこのことが全く事実であることを確認する文書とある専門家のグループより提出された。大

学教授で構成されるこのグループには、痛みに関する専門家や、アメリカ産科・婦人科大学の元学長二名も含まれていた。彼らの手紙の内容を紹介しよう。

大統領閣下

ここに署名した26名は、内科医として、胎児が立派に人間であり、痛みの感覚もあることを、あなたとともに国民の皆様に伝えるお手伝いが出来ることをうれしく思います。

人間の胎児、早産児、および新生児の体の各部分

非常に複雑で感知力があり、人間としての機能が完成されていることは、科学的に既知の事実でありま

す。胎児も新生児も、刺激に反応することは、全く疑いのない事実として確立してあります。

痛みを感じ、痛みに反応する能力は、明らかに出産の際に発達するものではありません。実際、現代に最先端の医療の場では、出産直前、出産中、出産直後において胎児に感覚的なダメージや刺激をなるべく与えないような方法や

手術を取る努力がなされています。

リアルタイム超音波画像、子宮内視鏡、胎児の心電図および電子脳写術の研究により、過去18年間で

胎児に非常にはつきりした痛みや皮膚や音の感覚があることが証明されています。胎児は、子宮内の明るさ、暑さ、寒さの変化にも反応することが分かっています。胎児が飲み込む羊水の成分を変えることで味覚もあることが究

明されました。このことは胎児研究の第一人者であるウィリアム・ライリー卿の画期的な研究により、詳細な文書が発表されています。

濃縮食塩水による中絶手術中の胎児の心電図と胎児の動きを見ると、死に及んで胎児が苦しんでいることが分かります。

ニューヨークタイムズ紙によると、濃縮食塩水を注射すればどうなるか分

ハンガリー人医師が自分なりの方法で中絶と闘う

関係各位へ

一九五〇年以來四百五十万件もの中絶手術が行なわれた、もと共産主義の国から手紙を受け取られて大変驚いておられるかもしれません。今日でも、ハンガリーのような小さい国で、毎日約三百五十件も中絶が行なわれているのです。

遺憾ながら、私が15年前に婦人科医になり、法律に従って中絶を行なわざるをえなくなつてから、これまで数多くの中絶を行なつてきたことをお話ししなければなりません。自分の信念を押し殺し、絶望した思いを隠し通した惨めな年月の後、ついに一ヶ月前、医学校付属の病院開設以來初めて、自分の信念や信仰に基づいて中絶しないことが許される

ように私は婦人科部長に願ひ出たのです。前もって予想できていたことでしたが、彼は激怒して私の要望を拒絶し、私を診療から外したりしました。しかし、いろいろなことがありましたが、私の申し出はついに認められたのです。その代わりに、私はすべての手術を行なうことを放棄し、今では病院の日課のようになつている中絶を行なうことを(共産黨員である)教授に命令されないうちに、外来の診療の仕事のみを行なっています。

にあるのですから。

私の人生における使命は思いやりと愛情にあふれる方法で胎児の命を守るために闘うことだとはつきりと感じ、認識しています。道徳的に問題のある、もと共産主義の社会で、マスメディアを敵にまわし、なおかつ穏やかに、魅力的に、辛抱強く闘い続けることはかなり難しい仕事です。

私は自身なりの方法で中絶と闘い続けるつもりです。私のために祈ってください。

匿名・ハンガリー

かつていて、中絶を行つていると言うある医師は次のように言っています。「濃縮食塩水を注射すると、胎児の動きが激しくなるのです。その動きを見るのはいやで、恐ろしく、見られないですよ。」

「大統領閣下、人間の胎児が痛みの感覚を備えていることを人々に伝えることに関して、あなたがゆるがぬ証拠に後ろ立てされていることをお知らせ致します。」

(JPLM)

イエール大学教授であつたアーノルド・ギセル教授の生涯を捧げた研究によつて導かれた次のような結論を否定し得るものは、現代の胎児学では発見されていないことを、我々は断言いたします。

『行動胎生学：人間の気持ちの芽生え』(一九四五年ハーパー・ブロス発行)における同博士の記述：「妊娠三ヶ月の終わり頃には、胎児は感覚を持ち、動く生体と発達しているのです。性質まで思索する必要はないでしょう。ただ、胎児の身体と精神が正常に機能しているものと断言しても差し支えないと思

病院、生命保護政策採択を発表

「以下は、ルイジアナ州のムーサ記念病院にて満場一致で承認された妊娠中絶及び安楽死に関する声明である。

この病院の医師らは、医者に中絶や安楽死を依頼することが神聖なるヒポクラテスの誓詞に反することであることを正式な形での発表を望んでいた。声明の全文は以下の通りである：」

私達、ムーサ記念病院の医師一同は、妊娠中絶及び安楽死に対する私達の立場を地域社会、州、そして国に対して明確にしたい。

医療科学は非常に正確であり、すべての人間の命が女性の卵子と男性の精子が結合する受精の時点で始まり、最後には自然の死で終わるといふ事実を否定することはできない。ところが、中には真実より

も自らの考えを優先させる人がいるために科学の証明が無視されることがある。しかし事実は事実である。つまり、まだ誕生していない赤ん坊も受精の瞬間から命を授けられた人間なのである。人間の存在においてどの過程にあつても、それは発育の質や段階に関わらず、法や憲法の下に妊娠中絶という暴力からの保護を受ける権利があるのだ。このような行為はすべて犯罪とみなされるべきである。

私達医師一同は、ヒポクラテスの精神の下、命を尊重し、いついかなる場合においても可能な限り医学を通してその発育を見守るために集まったのである。ヒポクラテスの誓詞には以下のようなことが書かれて

いる。私は自分の能力や判断

に基づいて患者にとって最善の処方ækだし、何人をも傷つけることはしない。快樂のための致命的な薬を処方することもしないし、患者に死を至らしめるような忠告はしない。女性に中絶を促すために避妊用ペッサリーを渡すこともしない。

妊娠中絶や安楽死を医者に求めることは、何世紀の間、西洋医学倫理の基本を成してきたこの神聖なる誓いに背くものなのである。

社会は、妊娠や人間の成長が暴力行為によつて変更される条件には決してならないことを認めるべきである。患者の生命を終わらせてしまふ医学的措施にしる、必要不可欠の治療を倫理的に中止するにしろ、安楽死は不道徳的であることに変わりはない。これらの行為は、例え法的には認められているとしても、医学が追求する目的

を台無しにすることになる。医師には患者を治す義務があるのであつて殺す義務があるのではない。生命に対する責任があるのであつて、死に対しての責任ではない。計画的行為によつて人間の命を奪うような医師や医療施設を、だれが信用し尊敬することができようか。いかなる状況にあつても何の罪もない人の命を直接奪うような権利を要求してはならないのだ。おなかの中にいる子どもや高齢者を殺す権利が認められていると考える人は理性の現実を目を背けているとしか考えられない。

特別な理由に限つて妊娠中絶を認めることは問題の解決にはならない。例え妊娠がレイプや近親相姦によるものであつても、中絶を行うことは私たちが医師としての職業を悪用することになる。なぜなら人間の命を奪うことには

変わりないからである。性心理学者の中には、「近親相姦」を愛情ある関係ならなんでもいいというように定義し直している者もでてきている。このような拡大解釈は今後もいつそ増えるだろうし、それによつて中絶施設も潤うことだろう。母親の命に関しては、母子ともに救うために社会も医療施設も最新のテクノロジーを駆使して対応しなければなら

ない。

わが国の立法者に中絶や安楽死から人の命を救う法案を通してもらうよう、すべての地域社会が協力してくれることを祈ります。これからの世代にも生きる権利、自由を与えられる権利、そして幸せを追求する権利を再び与えてあげられるように。

命は神聖なもの

フィリピン人口委員会の委員長は、こう言いました、「命に関してフィリピンが取る立場は、我々の憲法の基礎となる基本的原理に沿っている。それには、人間の命は神聖であるという見方が含まれている。人の今への尊敬の念は、最重要で、譲渡出来ないものである。」

フィリピン国家は、家族計画としての中絶に、断固として反対する。我々の憲法は、受胎の瞬間から、母親とその胎内の子ども両方の命を守る事を命ずる。

家族とは、社会の基本的単位であり、男女間の、永続する二人だけの結婚の上に定着していなければならぬ。国を作っていく上で女性の役割は認められ、奨励されなければならない。性の基本的平等は推進されなければならない。人間の発達には、政治、経済、文化、宗教と言った人間の要求や熱望を伝えながら、全体論としてとらえるべきである。」

population research institute review 11-12/94

10月

Pro Life Hero

小松俊美 様

今月のプロ・ライフヒーローは事務所からです。今年、82才になられた小松俊美さんは82才とは思えない若さで、プロ・ライフの会計と皆様から御注文が届いた時の資料発送を一手に引き受けて下さっています。この運動の最初から今日まで、代表者のノボトニー先生と共に事務所でのこの運動をやり続けてきたただ一人の方です。台風12号で事務所が休みとなった朝、小松さんのことをプロ・ライフ・ヒーローで書かせて」とお願いの電話をすると最初は辞退されながらも、プロ・ライフに関わりだした頃のことでは家内のほうが覚えているから」と言われて、奥さんからお聞きすることになりました。

最初、代表者のノボトニー先生が一人でこの運動を始められたのですが、プロ・ライフ・ニュース第一号発行の87年10月、封筒の宛名書きを教会の信者が三人手伝うことになりました。その一人が奥様で、先生が車で家まで封筒を持って行って下さり、その時、初めて先生と小松さんは出会ったそうです。奥さんのおっしゃるには、奥さん自身は字を書くのはあまり得意ではないけれど、主人ならばと思って、引き受けたとおっしゃいます。当時、PRはなく、千円送って下さった方に番号をつけて、ニュースを送っていました。11月に先生は休暇でアメリカに帰られ、きつとニュースのことを心配しているだろうと考えた小松さんは手紙でこのようにやっているからとお知らせし、その便りを読んで、先生はずいぶん安心されたそうです。

74才でワープロを買い、聖書を打って練習し、現在、二台目のワープロになっていきます。そのワープロには会計の資料がびっしり入力されています。そして、昨年の復活祭に洗礼のお恵を頂いた小松さんは、先生のなさっていることは正しいことだと思っているので、自分は今までの人生の罪の償いと思つて、ただひたすら先生に協力しているのです。これくらいのことでは赤ちゃんも助かるとすれば、この仕事はやる価値があると思う。」とおっしゃっておられます。

奥様が橋渡し役をなさったこの仕事…今、小松さんは生きがいと感じ、9年間ずっとボランティアで取り組んで下さっています。「これからも元気でいるうちにはできるだけ続けていきたい。」とも言われています。

(大岡滋子)